

博士論文審査結果の要旨

学位申請者 中 村 英 樹

主論文 1 編

Balloon Occlusion Decreases Liver Injury Following Transcatheter Arterial Chemoembolization for Hepatocellular Carcinoma.

京都府立医科大学雑誌 126:763-770, 2017.

審 査 結 果 の 要 旨

肝細胞癌に対する治療として、経カテーテル肝動脈化学塞栓療法 (TACE) が広く行われている。1990 年代には超選択的 TACE が行われるようになり局所制御率が高まった。近年バルーン閉塞下 TACE (B-TACE) を行うことで、通常の超選択的 TACE (cTACE) よりも肝細胞癌へのリピオドール集積の増加や局所制御率の向上が得られ、腫瘍周囲の肝実質へのリピオドールの流入が減ることが報告されており、申請者は B-TACE の安全性、治療後の肝障害と治療効果について、B-TACE を行った 36 例 45 結節と、cTACE を行った 41 例 45 結節の肝細胞癌を検討の対象とし、治療後の肝障害、肝予備能の変化、治療の有害事象、治療効果について後ろ向きに検討を行った。

患者背景には B-TACE 群、cTACE 群間に差はみられなかったが、治療時に投与した lipiodol の量は B-TACE 群が多く、複数個所同時に治療した症例が B-TACE 群が多かった。治療 3 日後の ALT 値は B-TACE 群で有意に低く、肝障害は軽度であった。肝予備能は両群とも治療前後で有意な変化は見られなかった。有害事象は、治療後の腹痛の頻度が B-TACE 群では有意に少なかった。治療効果は、TE4, TE3, TE2, TE1 が、B-TACE 群では 55.6%, 17.8%, 20.0%, 6.7%, cTACE 群では 44.4%, 22.2%, 26.7%, 6.7% で両群間に有意な差はみられなかった。

肝障害は、B-TACE 群で lipiodol の投与量が多く、また、同時に複数個所治療した症例が多かったにもかかわらず、B-TACE 群の方が軽度であった。これはバルーン閉塞に伴う腫瘍と肝実質の血流動態の変化の違いにより、肝実質への lipiodol 流入が抑えられたためと考えられた。肝細胞癌患者の多くは肝硬変症を合併しており、また、肝内再発のため TACE などの治療を繰り返すことで肝予備能が更に低下することが治療上の大きな問題点となっている。その点、肝細胞癌の治療において肝障害が軽度な B-TACE は有用な治療法であると考えられた。

以上が本論文の要旨であるが、B-TACE が従来の cTACE に比し、軽度の肝障害で同等の効果が得られる治療法であることを明らかにした点で、医学上価値ある研究と認める。

平成 30 年 2 月 15 日

審査委員 教授 黒 田 純 也 ㊞

審査委員 教授 高 山 浩 一 ㊞

審査委員 教授 福 井 道 明 ㊞